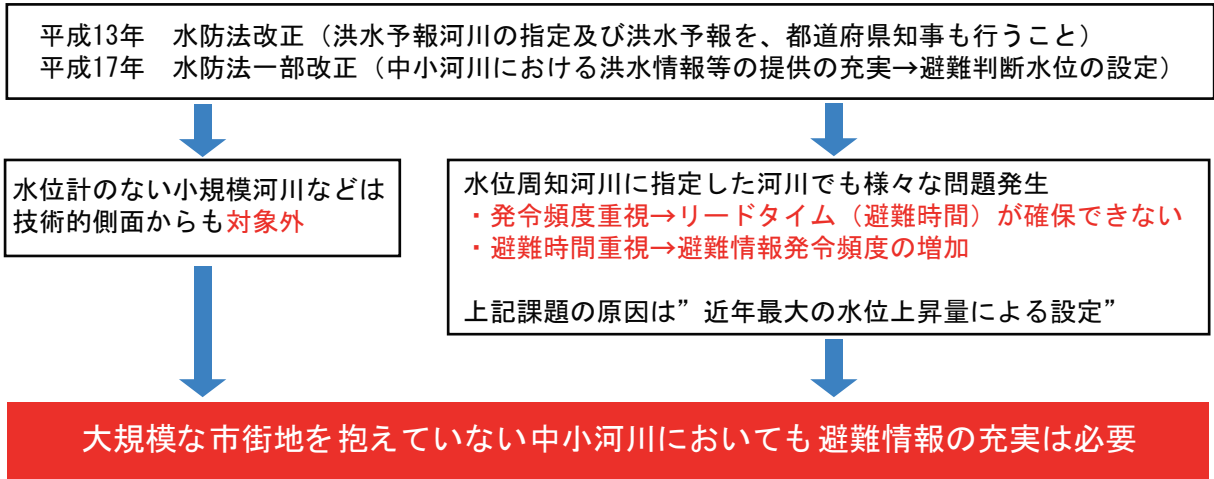




1. 中小河川における避難情報の課題

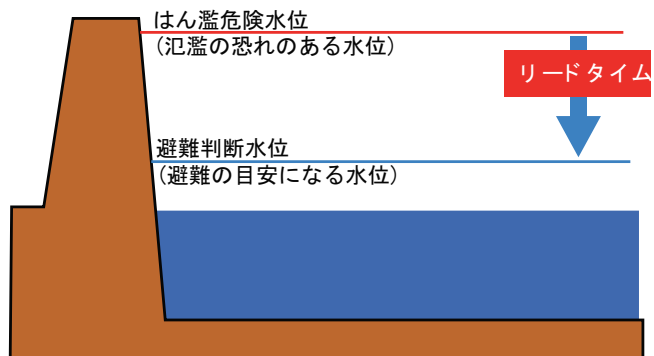


◆避難判断水位の設定方法

避難判断水位は、はん濫危険水位から、避難時間等により設定されるリードタイムの水位上昇量（近年の最大水位上昇量）を差し引いて設定します。

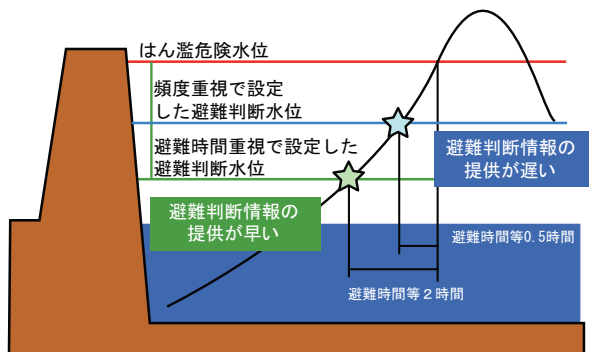
ただし、リードタイムを確保すると、避難判断水位の到達頻度が高くなる場合は、頻度重視で設定することが多く、避難時間を確保できていない河川もあります。

こんな問題が発生！！

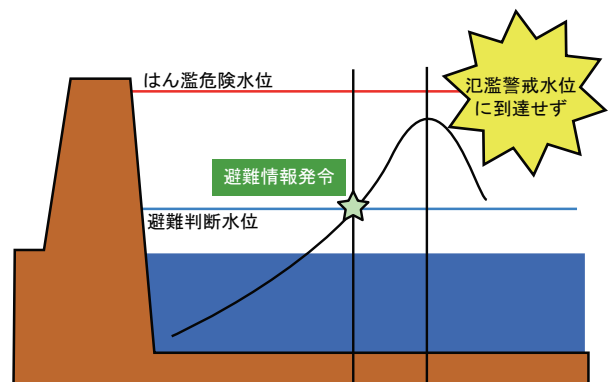


◆水位情報による避難判断情報の問題点

- 避難判断情報の発令が早すぎたり、遅すぎたりします。



- はん濫危険水位に到達しない場合に避難判断情報を提供する可能性が高くなります。



2. 洪水毎の適切な避難情報の提供

◆業務対象河川

- ①水位計の設置がない小規模河川
→避難情報を水位では発表できない・・・
- ②リードタイム等課題のある水位周知河川
→避難情報頻度が高すぎる・・・

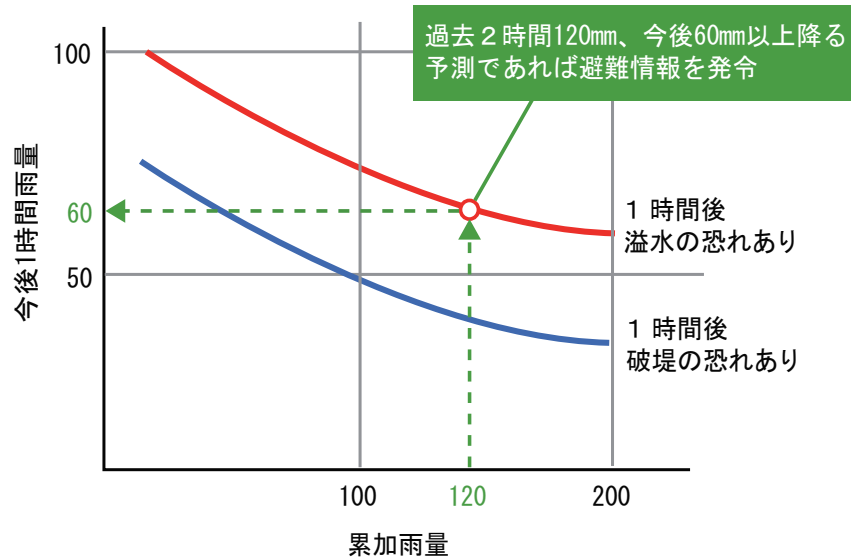


雨量情報ツールで避難情報を
充実させることが可能！

※洪水到達時間3時間以内 全体計画・整備計画等基本諸元のある河川が基本となります。

◆雨量情報ツールとは？

雨量情報ツールとは、3時間予測までは精度が比較的良好とされている気象庁発表の降水短時間予測を用いて、水位からではなく、過去2時間雨量と1時間後の予測雨量により、事前に検討した避難判断曲線から避難情報を判断するツールです。

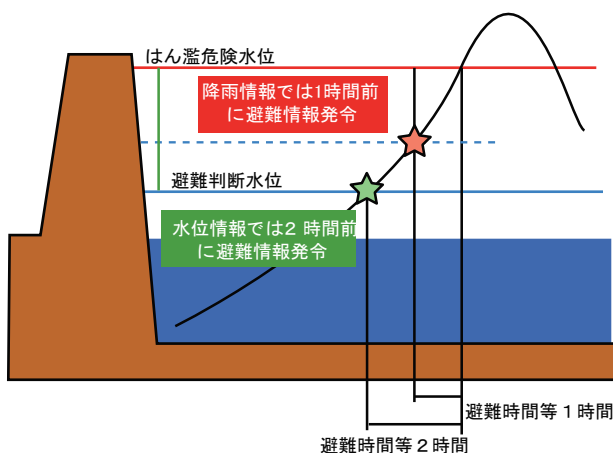


◆雨量情報による避難判断ツールのメリット

- ①水位計が設置されていない河川で情報提供が可能
- ②洪水特性に合わせた適切な避難判断情報の発令が可能

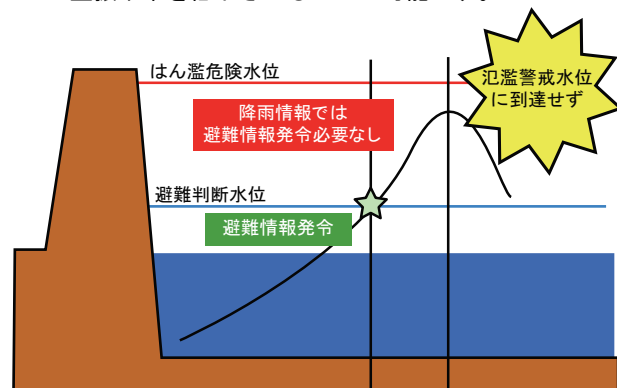
【適切な時期での避難判断情報発令】

→早すぎず、遅すぎない適切な時期での避難判断情報の発令が可能となります。



【避難情報発令の頻度低下】

→避難の必要がないのに避難させてしまう空振り率を低下させることが可能です。



- ③水位情報と合わせ精度の高い避難情報提供

